

伊勢地域における布留式系土器の分布と受容に関する予察

－雲出川・安濃川流域を中心として－

渡辺 和仁

はじめに

近畿地域の古墳時代前期の土師器として知られる「布留式土器」は、末永雅雄・小林行雄・中村春壽が奈良県天理市の布留遺跡出土資料を標識として設定された土師器の古い様式を示す土器様式である（末永・小林・中村 1938）。布留式土器にある「小型丸底土器」の器形や特徴は、斉一性の高いものとして認識されており、近畿地域のみならず西日本及び東日本に広く分布していることを、小林行雄が布留式土器を提唱する以前に言及している（小林 1935）。

布留式土器の様式を構成する代表的な器種は、体部が球形かつ丸底で、口縁部が内湾しながら立ち上がり端部を肥厚させる甕（布留式甕）と小型丸底壺、小型有段口縁鉢、小型器台のいわゆる小型（精製）器種^①、柱状の脚柱部を持ち、脚裾部が明瞭に屈曲した脚部と口縁部に向かって外傾しながら伸び、稜を有した坏部をもつ有稜高坏である。

翻って、同時期の伊勢地域を含む東海地域には、台付甕と坏部及び脚部が内彎志向を示す有稜高坏^②、装飾性の強い壺（パレス壺）など、弥生時代後期から続く器種・器形の土器で構成される。中でも S 字状に屈曲した口縁部を持つ S 字状口縁台付甕とその流れを組む宇田型甕は、主要な組成を占める。

このように伊勢地域では、近畿地域の布留式土器とは明らかに異なる伝統的な土器様式が展開するが、古墳時代前期中葉を前後する時期以降から、布留式土器の影響を直接的または間接的に受けた甕や小型丸底壺、布留式土器の有稜高坏に系譜が想定される屈折脚高坏^③などが、認められるようになり、一定の組成を占めながら、土器様式に変化が生じていくようになる。つまり、弥生時代以来の伝統的な土器様式が大きく変容する状況を示すのである。

本稿では、伊勢地域において古墳時代前期中葉前後から中期前葉にかけて認められる「布留式土器」

が直接的に搬入されたと思われる土器と間接的に影響を受けたとみられる土器を含めて、いわゆる「布留式系土器」^④として広義的に捉え、その分布と土器の相対的な時期の位置づけを中心に、現在の状況と認識を整理するとともに、今後の伊勢地域における当該土器の受容について考えてみたい。

1 伊勢地域における研究抄史

伊勢地域における布留式系土器の把握は、主に当該期の地域的な土器様相を示す中で言及されてきた。しかし、当地域における布留式系土器にとりわけ焦点が当てられた研究は、現状において少ない。

（1）土器様相の把握

古くは、伊藤久嗣により津市の納所遺跡の調査報告書で、弥生時代前期から古墳時代後期にわたる大まかな変遷が示され、小型丸底壺・小型器台・小型鉢との共伴を基に布留式土器との時期的な関係性に言及された（伊藤 1980）。その後、山田猛が亀山市の山城遺跡の調査報告書において、従来把握されていた欠山式と元屋敷式を再編し、元屋敷式とを重ね合わせる形で山城Ⅰ～Ⅴ式^⑤という段階を設定した（山田 1994）。この中で、小型精製器種と屈折脚高坏は山城Ⅰ式で出現し、小型精製器種は山城Ⅱ式まで存在するが、山城Ⅲ・Ⅳ式で粗製化した小型丸底壺が残存する形となり、屈折脚高坏は山城Ⅴ式においても継続する方向性が示された。山田の段階設定においても伊藤と同様に小型精製器種と屈折脚高坏の出現と共伴が大きな指標とされた。

当地域の当該土器様相の把握で大きな画期となったのは、雲出川流域にある津市の雲出島貫遺跡の発掘調査での成果であろう。川崎志乃は、当該遺跡の調査報告書において、通時的に組成する S 字状口縁台付甕と欠山式以来の流れを組む有稜高坏（高坏 A）、及び有稜高坏から取って変わる屈折脚高坏（高坏 C）を軸に地域的な編年案を示した（伊藤・川崎 1998、川崎 2001）。川崎の示した編年（いわゆる島

貫編年C期)は、当該遺跡内で出土した在地の土器のみならず、他地域からの搬入土器との関係性も重視されている点で伊藤や山田とは大きく異なっており、他地域土器との関係性についての言及も多い。近畿地域に由来する布留式系土器については、島貫CⅢ期⁶⁾から直接の搬入と考えられる布留式系の甕、小型丸底壺、小型有段口縁鉢、小型器台や屈折脚高坏が確認されるようになり、次第にその模倣品が製作され、島貫CⅣ期以降に屈折脚高坏が独自に変化していくことを指摘している(川崎 2001)。

さらに鈴鹿川流域にある鈴鹿市の保子里遺跡では、古墳時代前期から後期に至る通時的な土器群の把握が行われた。田部剛士は、S字状口縁台付甕と高坏の変化を軸に、保子里0期～4期までを区分し、既存編年との対応関係を整理しており、在地ではない異系統の土器についても言及している。布留式系の器種の共伴関係から保子里1期新相～2期をおおよそ布留式土器の併行期とし、濃尾平野における松河戸Ⅰ～Ⅱ式⁷⁾として把握した。田部はこのうち、小型有段口縁鉢を布留式系と捉え、併行関係を見る上での指標としており、やや退化した形態のものが、S字状口縁台付甕C類に伴うことを示唆している。田部は、さらに区分の中で屈折脚高坏の出現を大きな画期として捉えている(田部 2013)。

このように、当該期の伊勢地域あるいは遺跡単位を含む小地域における土器様相の変遷を示す中で、布留式系土器が触れられてきているが、あくまでも近畿地域との編年的な併行関係の把握に主眼が置かれたものであるといえよう。

(2) 伝統的製作技法と布留式系土器

編年的な土器様相の把握の一方で、伊勢地域に流入してきた布留式系土器が在地の土師器に与えた影響について、土器の伝統的な製作技法と形態の視点から検討されているものがある。

伊藤裕偉は、雲出川支流の中村川流域にある松阪市の堀田遺跡SD 42出土資料から、形態的には在地の系譜として追えないが、製作技法が伝統的な在地の手法によるものと、形態は基本的に在地の形態のものに細部の形状や製作技法が布留式土器の影響を受けて作られているものの2つがあり、在地の土器と布留式土器の融合現象が生じていると指摘した

(伊藤 2002・2005)。

前者にあたる屈折脚高坏には、脚柱部外面の坏部と接合される付け根部分に、S字状口縁台付甕の脚台部外面、体部と接続する付け根部分にみられる「左上→右下」方向の粗いハケメと同一の調整がなされた個体が存在しており、S字状口縁台付甕の製作技法が布留式土器からの系譜が想定される屈折脚高坏に採用されたと指摘した。後者では、外面に粗い羽状のハケメ調整が施された伝統的な台付甕にも関わらず口縁端部が肥厚する形態となり、内面にはケズリ調整が採用されているもので、布留式土器の要素が取り入れられていることを示唆している。

伊藤は、このように在地系要素と布留式系要素の融合が生じている土器様相として、雲出川流域の島貫CⅣ期及び松河戸Ⅰ式併行段階に相当する「堀田式」を提唱し、後続するものとして「河曲B群土器」と「高茶屋式」を設定して「堀田式」でみられた製作技術と形態における伝統性の保持が継続している点を指摘している(伊藤 2002・2005・2006)。

この伊藤の指摘を踏まえて、以前筆者も安濃川流域にある津市の小ブケ遺跡や替田遺跡、神戸遺跡、太田遺跡出土の屈折脚高坏の中に、堀田遺跡で見られた同様のハケメ調整があることを確認し、雲出川流域と同じ現象が生じていることを指摘した。さらに、小ブケ遺跡の脚柱部付け根に粗いハケメ調整が施された屈折脚高坏には、坏部内面底部に粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられていることを確認した。粗い砂粒を含む粘土を底部に充填あるいは貼り付けるという行為は、在地のS字状口縁台付甕の脚台部や一部の壺の底部で確認されており、S字状口縁台付甕の製作技法との共通性が極めて高いと考えた。

この屈折脚高坏にみられる在地の土器製作技法と同一の共通性から、筆者は「布留式系土器」の器種・器形は取り入れる一方で、製作技術の基盤は伝統的な土器製作技法によって受容した姿があることを言及した。さらに、安濃川流域における布留式系土器の大まかな受容の時期をS字状口縁台付甕との共伴関係から、おおよそC類新相～D類に伴う傾向にあり、松河戸Ⅰ式併行段階を中心とした時期を想定した(渡辺 2019)。

（３）小結

伊勢地域における布留式系土器に関わる研究史について、編年的な土器様相の把握という視点と土器製作技術を含めた受容の側面からの視点で概観した。しかし、これら検討においては、以下の課題が依然解決されていない。１つ目には、近畿地域の布留式土器を構成する器種のうち、どの器種がどれだけ伊勢地域で分布しているかという点、２つ目にはその器種が出現から消滅までの存在する時期がいつの段階にまであたるのかという点、３つ目にはこれら布留式系土器の器種が、在地の土器にどれだけの影響を与えながら受容されたのか、または選択的に受容されたのか否かという点である。

本稿では、今後の方向性を示すためにも、主に１・２点目についての現状における認識を示しながら、３点目についての予察を行っていきたい。とりわけ本稿では、先行研究においても触れられている雲出川流域と安濃川流域での資料^⑧を基に言及していきたい。

２ 雲出川・安濃川流域での分布

（１）前提条件

対象とする雲出川流域と安濃川流域については、いずれも各河川に合流する支流と周辺河川を含むため、中心河川となる雲出川・安濃川とその周辺を包括した広義な範囲として把握する。従って、雲出川流域は支流である中村川流域をも含む。安濃川流域は、支流である美濃屋川流域及び安濃川の南側を流れる岩田川流域、丘陵を隔てた北側を流れる志登茂川流域をも含む。この流域単位の設定は、石井智大が弥生時代終末期の遺跡群の動態を把握するために設定した遺跡群の範囲（石井 2012）とほぼ重なる。

また、今回の把握では、拙稿（渡辺 2019）でも示した布留式系土器の大まかな器種区分別（第 1 図）^⑨の有無を共伴する台付甕の類型とともに示すこととする（第 1・2 表）^⑩。本来ならば、独自に全ての土器の細別分類案を示し、その有無を追っていくべきであるが、現状では巨視的な方向性を把握するために、敢えてこの方法で提示する。器種のうち小型の鉢については、口縁部が有段のものと無段のものがあることから、現状では便宜的に区分している。

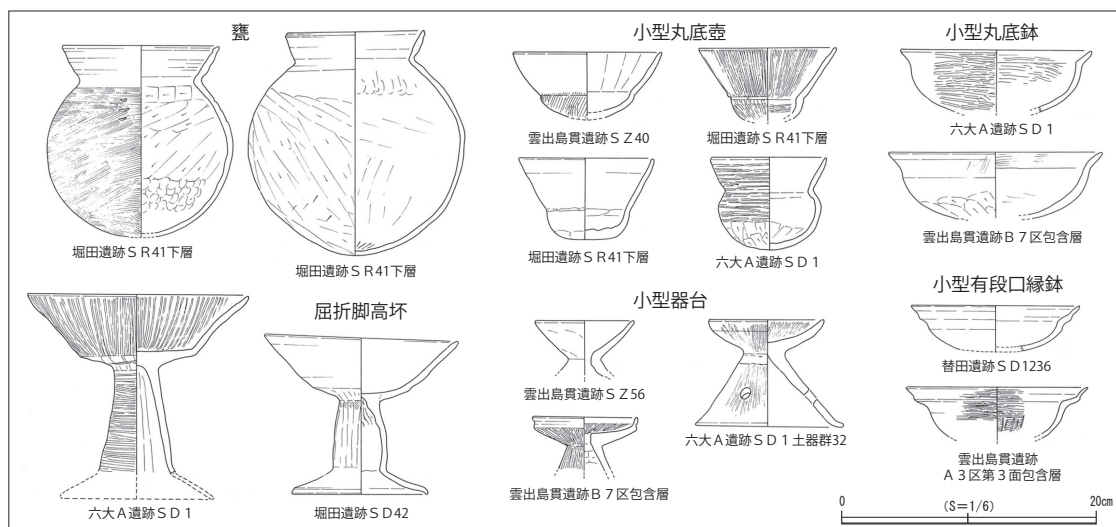
なお、台付甕の類型は、現状で広域的に使用されている濃尾平野に所在する廻間遺跡及び松河戸遺跡で示されている分類（赤塚 1989・1990・1994、赤塚・早野 2001）に従った。

（２）分布の傾向

布留式系土器は、雲出川流域では 14 遺跡（第 1 表）、安濃川流域では 25 遺跡（第 2 表）で確認できる。全体として出土遺跡数が多いと思われるが、1 遺跡で 1 点しか出土していない断片的な事例も含んでいる。いずれの流域においても布留式系土器の主要器種である甕、屈折脚高坏、小型丸底壺、小型丸底鉢、小型有段口縁壺、小型器台の全てが出土しているが、器種は遺跡により異なっている。全器種が揃っているのは、雲出川流域では雲出島貫遺跡と西肥留遺跡の 2 遺跡、安濃川流域では六大 A 遺跡と限定される。その他の遺跡においては 1～5 器種が欠落する。また、小型器種は、小型器台はあるものの、小型器台に載せる小型丸底壺ないし小型丸底鉢・小型有段口縁鉢のいずれもが確認できない遺跡もある。発掘調査が限定されていることも影響しているであろうが、必ずしもセット関係が保たれていない可能性について、今後遺跡の存続期間を考慮にいれつつ検討していく必要がある。

安定的に出土が確認できるのは、屈折脚高坏と小型丸底壺であり、次いで甕と小型器台という傾向が読み取れる。しかし、とりわけ出土が限定されるのが小型有段口縁鉢である。この小型有段口縁鉢については、立花実によって東海地域を含む東日本における分布が整理されており、全体的に出土例が少ないことが示されている（立花 1992）。立花が整理した以降、当地域における当該期の出土例は飛躍的に増加したが、出土分布の傾向としては変わらない状況を示しているといえる。

共伴する台付甕は、S 字状口縁台付甕の A～D 類と宇田型甕である。このうち、明確な A・B 類の共伴例は、溝や流路から出土したものである。これらの溝や流路は、当該期以前の土器をも含む複数時期に機能していたものである。一方、須恵器出現以降も組成をなす宇田型甕の共伴例があるが、堅穴住居や土坑などの一括性が認められる遺構から土師器単独で出土している例で確認されている^⑪。それら



第1図 布留式系土器の器種区分図

第1表 雲出川流域における布留式系土器の出土分布

遺跡名	出土遺構	布留式系					台付壺				宇田型	報告書
		屈折脚高坏	小型器種			S字状口縁						
			丸底壺	有段口縁鉢	器台	A類	B類	C類	D類			
雲出島貫遺跡	【第1次】SH63・73・78・109、SK80、SD55、SZ24・40・48・56・57・61、A1・3・4区第3面包含層 【第2次】A4拡張、SH172・173 【第3次】B2・B5区SD532、SD554、SZ504（1面東・2面上・2面下含む）、SZ514、SX364・387・477、B2・5・7区包含層 【市調査】包含層	●	●	●	●	●	●	●	●		三重県埋蔵文化財センター1998『嶋拔 第1次調査』、三重県埋蔵文化財センター2000『嶋拔Ⅱ』、三重県埋蔵文化財センター2001『嶋拔Ⅲ』、津市教育委員会2002『雲出島貫遺跡発掘調査報告』	
高茶屋大垣内遺跡	SH213・220、SA309、SK212、SD501、N8Pit7、G地区包含層	●		●		●		●	●		三重県埋蔵文化財センター2000『高茶屋大垣内遺跡（第3・4次）発掘調査報告』	
木造赤坂遺跡	SH552・556・566・576、GF14Pit3	●	●							●	●	三重県埋蔵文化財センター2012『木造赤坂遺跡遺跡・池新田遺跡・井手ノ上遺跡発掘調査報告』<第2分冊>
井手ノ上遺跡	SH7	●	●									三重県埋蔵文化財センター2012『木造赤坂遺跡遺跡・池新田遺跡・井手ノ上遺跡発掘調査報告』<第2分冊>
西肥留遺跡	SH227・253・414・426、SK361・423、SD332、SZ213・442、J40Pit6、2層（シルト）、第1面・第3面検出、第2－2面、Ⅳ－3層、排水溝	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	三重県埋蔵文化財センター2008『西肥留遺跡発掘調査報告』
赤部遺跡	SB120・143、SK85・88・95・116、SD81・148・169、第一・二包含層	●	●	●		●	●	●	●	●	●	松阪市教育委員会2007『赤部遺跡』
松本権現前遺跡	SH40・43、包含層（下層）	●	●	●	●					●	●	三雲町教育委員会1999『松本権現前遺跡発掘調査報告』
堀田遺跡	【第3次】SD4 【第4次】SD42、SR41下層 【第6次】SD151・168	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	三重県埋蔵文化財センター2002『堀田 第3～5次調査』、三重県埋蔵文化財センター2005『堀田第6次調査』
天花寺北瀬古遺跡	SR01	●	●	●			●	●	●	●	●	三重県埋蔵文化財センター1999『天花寺北瀬古遺跡（第1次）薬師寺北裏遺跡発掘調査報告』
下之庄東方遺跡	詳細不明		●	●		●		●	●		●	三重県教育委員会1983『下之庄東方遺跡（高畑地区）』
高畑遺跡	包含層ほか		●	●							●	一志町教育委員会1987『高畑遺跡発掘調査報告』
貝蔵遺跡	詳細不明	●	●		●		●	●	●	●		松阪市2006『嬉野史』考古編
高寺遺跡	SB12及びび包含層、SB1・SB1及びび包含層		●	●							●	一志町教育委員会1991『高寺遺跡発掘調査報告』
黒田遺跡	詳細不明		●	●		●			●			松阪市2006『嬉野史』考古編

第2表 安濃川流域における布留式系土器の出土分布

遺跡名	出土遺構	布留式系					台付甕				宇田型	報告書
		甕	屈折脚高坏	丸底壺	丸底鉢	有段口縁鉢	器台	A類	B類	C類	D類	
小ブケ遺跡	【第1次】SR3・13・29、Pit、遺構外 【第3次】SH320、SD306・319・326、SR301・308・311・315、2区sPit1	●	●	●			●	●	●	●	●	三重県埋蔵文化財センター2015『小ブケ遺跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2019『小ブケ遺跡（第3次）発掘調査報告』
清水西遺跡	包含層（流路内堆積層か）		●	●							●	三重県教育委員会1973『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
清水北浦遺跡	大溝、SD43		●	●			●				●	安濃町教育委員会・安濃町遺跡調査会2005『清水北浦遺跡発掘調査報告書』
辻の内遺跡	詳細不明	●					●				●	三重県考古資料普及会1976『昭和50年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
亀井遺跡	包含層			●								津市教育委員会2009『亀井遺跡（第2・3次）発掘調査報告』
森山東遺跡	SD6、自然流路	●		●			●				●	三重県埋蔵文化財センター1993『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』
太田遺跡	大溝		●	●				●	●	●	●	三重県埋蔵文化財センター1993『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』
納所遺跡	SD451	●	●	●		●	●			●	●	三重県教育委員会1980『納所遺跡―遺構と遺物―』、三重県埋蔵文化財センター2012『納所遺跡Ⅰ―遺構・土器・木製品編―』
蔵田遺跡	【第1～3次】SE1、SK11・13・14、SD9・10、SR3・4・5・7・8・9 【第4次】SR4 【第5・6次】SD28・48・55	●	●	●	●		●			●	●	三重県埋蔵文化財センター1998『蔵田遺跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2008『蔵田遺跡（第4次）発掘調査報告』、津市教育委員会2016『蔵田遺跡（第5・6次）発掘調査報告』
橋垣内遺跡	SR3	●	●	●	●		●	●	●	●	●	三重県埋蔵文化財センター1997『橋垣内遺跡発掘調査報告』
六六A遺跡	SK6、SD1（井泉7～9周辺、礫群2、上層礫群、土器群21・26・32・34・39・42・43・45・46・47・48・49・50・51・52・53武器形集中部・54・55・56含む）・SD4、SR2（土器群60含む）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	三重県埋蔵文化財センター2002『六六A遺跡発掘調査報告』
東浦遺跡	SH1・4・40・54	●	●	●						●	●	三重県埋蔵文化財センター1993『東浦遺跡・棕本南方遺跡ほか』
中蔭遺跡	包含層 【第3・4次】SK64	●		●	●		●		●	●	●	津市教育委員会1977『中蔭遺跡発掘調査報告』、津市教育委員会2009『中蔭遺跡（第3・4次）発掘調査報告』
山の脇遺跡	SR1 【第2次】SR2	●	●	●			●			●	●	津市教育委員会2007『山の脇遺跡発掘調査報告』、津市教育委員会2013『山の脇遺跡（第2次）発掘調査報告』
多倉田遺跡	【県調査】詳細不明 【町調査】SK105、SD102		●	●			●					三重県教育委員会1981『多倉田遺跡発掘調査報告』、安濃町教育委員会・安濃町遺跡調査会1997『多倉田遺跡発掘調査報告書』
中井藤ヶ森遺跡	SD4、包含層	●	●	●							●	三重県教育委員会1983『昭和57年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
浄土寺南遺跡	SD58	●	●	●							●	三重県教育委員会1981『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
西垣内遺跡	包含層		●				●			●	●	津市教育委員会1986『西垣内遺跡発掘調査報告』
立花堂遺跡	SD62		●								●	三重県埋蔵文化財センター2008『立花堂遺跡発掘調査報告』
神戸遺跡	【鳥井前】SD2・5・15 【第2次】SB59、SK28、SD11・41・42、SZ15、i6Pit10、包含層	●	●	●		●	●	●		●	●	三重県埋蔵文化財センター1999『神戸遺跡発掘調査報告―鳥井前地区―』、三重県埋蔵文化財センター2001『神戸遺跡（第2次）・替田遺跡（第3次）発掘調査報告』
替田遺跡	【第1・2次】SE1150、SD1112・1236、Ⅲ層、包含層 【第5～8次】SE105・SK103・SK222	●	●	●		●	●		●	●	●	三重県埋蔵文化財センター2008『替田遺跡（第1・2次）発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2007『替田遺跡（第5次～第8次）発掘調査報告』
式ノ坪遺跡	SD91・SD92		●	●						●	●	三重県埋蔵文化財センター2005『式ノ坪遺跡発掘調査報告』
里前遺跡	【第1次】包含層2層 【第2次】SZ55、包含層		●	●				●	●	●		三重県埋蔵文化財センター2002『里前遺跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2005『里前遺跡（第2次）発掘調査報告』
林垣内遺跡	SK9、SD12	●	●								●	三重県埋蔵文化財センター2012『林垣内遺跡発掘調査報告』
新畑遺跡	SB2・SB7・SB8		●	●			●			●	●	新畑遺跡発掘調査団1973『新畑遺跡発掘調査報告』

第3表 布留式系土器と台付甕の共伴関係

	遺跡名	出土遺構	布留式系					台付甕						遺跡名	出土遺構	布留式系					台付甕					
			甕	屈折脚高坏	小型器種			S字状口縁				宇田型				甕	屈折脚高坏	小型器種			S字状口縁				宇田型	
					丸底壺	丸底鉢	有段口縁鉢	器台	A類	B類	C類							D類	丸底壺	丸底鉢	有段口縁鉢	器台	A類	B類		C類
雲出川流域	雲出島貫遺跡	B2・5区SD532最下層						5	1	1			雲出川流域	木造赤坂遺跡	SH566	4								1	1	
		B2・B5区SD532下層	1	2				1	3	1	6				SH576	1	1							1		
		B2・B5区SD532上層	1	1	1			1		1	1				SH7	1	3								2	
		SZ56	1	1	1			1			2		小ブケ遺跡	SR315第23層	1	1	1						1			
		SD55上層	2		1	2	3			1	6	1			SR315第20層		3	1						1		
		SH63	1		1		1	3			7				SR315第19層		2								2	
		SH73	1		2			3			7		蔵田遺跡	SK13	1	7	2								3	2
	堀田遺跡	SD42	1	2	2			1			4			SK14	1	1	1								1	1
		SR41下層	1	11	1				1		1	2	替田遺跡	SE1150			1			1				10		
	松本権現前遺跡	SH40		3	1	1					1			SE105		6	2								3	2
		SH43	2	1							3		六大A遺跡	SK6		1				1				1	1	
	赤部遺跡	SB120	3	3	4						1	1		SD1土器群42			1						1	1		
		SB142		1	2							1		SD1土器群43		1				2			1	3		
		SK88		2							3	6		SD1土器群47	1									1		
		SK95			1			1			1			SD1土器群49		5								1	1	
	木造赤坂遺跡	SH552		5								5		SD4		4										1
		SH556		1								2														

を考慮していくと、総じて布留式系土器は、C類以降の台付甕と伴う傾向があると考えられる。

(3) 小結

布留式系土器の出土分布から、現状における当地域における傾向を整理すると、以下のとおりである。

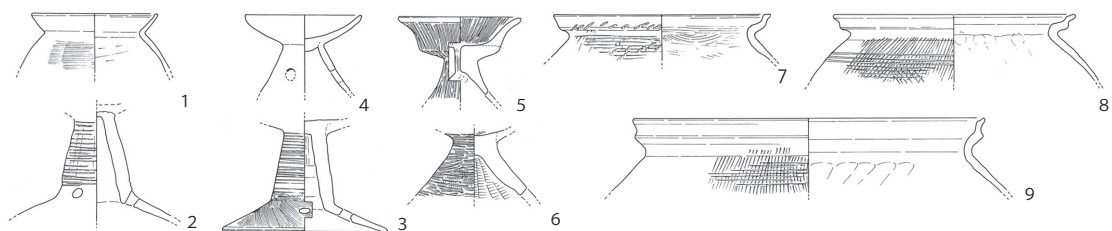
- ①布留式系土器の主要器種が確認できるが、全器種が出土している遺跡は限定される。
- ②小型器種は、必ずしもセット関係が整った状態で流入していない可能性があり、小型有段口縁鉢は出土例が少ない。対照的に屈折脚高坏と小型丸底壺は、多くの遺跡で確認でき、在地の土器組成に影響を与えている可能性がある。
- ③布留式系土器が当地域で確認できるのは、S字状口縁台付甕C～D類が組成する時期に該当する可能性がある。

このうち、①は各遺跡の存続期間の幅と遺跡を持つ性格との関係性が大きく反映している可能性があ

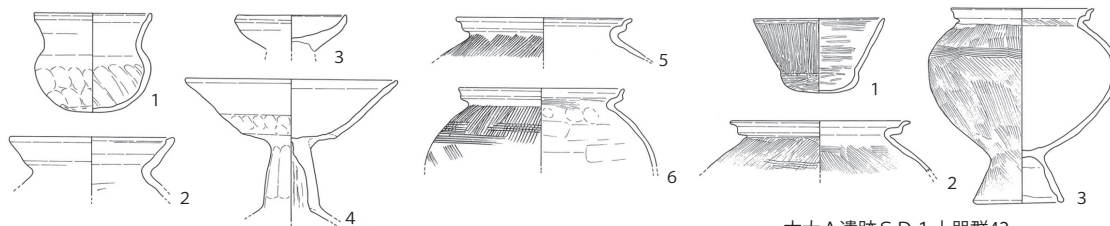
るため、今後遺構を含めた遺跡全体及び周辺遺跡との比較及び評価が必要であろう。②・③は、具体的な共伴例を示すことにより、より時期の限定及びセット関係の把握が可能になるといえる。

3 布留式系土器の相対的な時期

前章での整理を基に、具体的な遺構からの数量を示す(第3表)⁽¹²⁾。抽出した遺構は各報告書において、一定のまとまりを持った出土状況を示し、廃棄の同時期性が推定されるものを取り上げた。また、溝や流路出土のうち層位的に前後関係の把握が可能なものや、まとまった土器群として出土した資料も含めた⁽¹³⁾。なお、数量は各報告書において図が掲載されている点数を反映している。破片を含めた数量把握が本来望まれることであるが、布留式系土器は在地の土器とは異質なものであることから、報告段階において容易に除外するという判断はされ難く、可

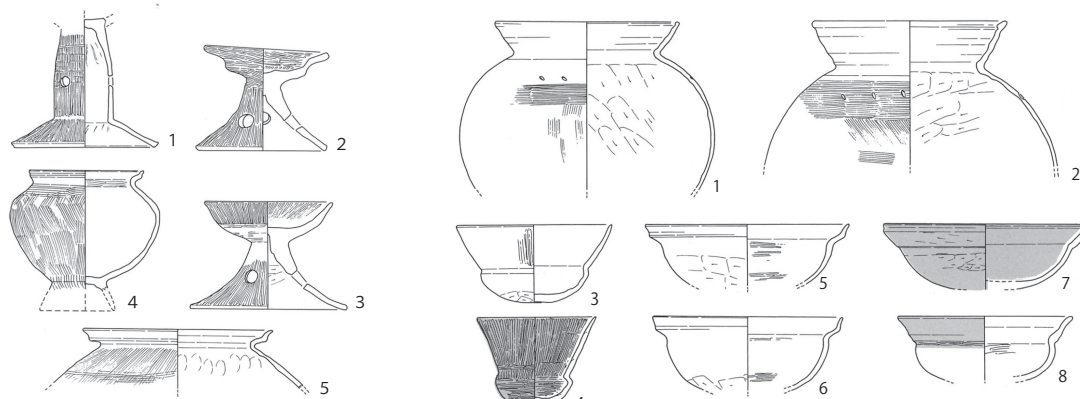


雲出島貴遺跡 S D532 下層



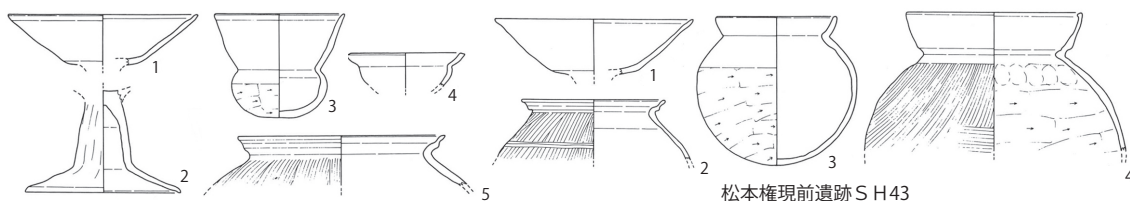
雲出島貴遺跡 S D532 上層

六大A遺跡 S D 1 土器群42



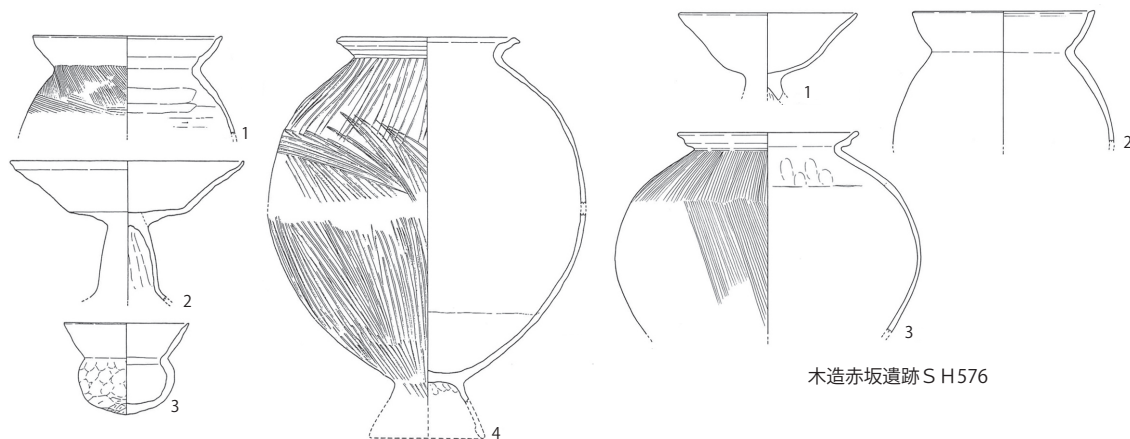
雲出島貴遺跡 S D55 上層

六大A遺跡 S D 1 土器群43



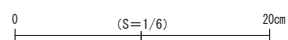
松本権現前遺跡 S H40

松本権現前遺跡 S H43



蔵田遺跡 S K13

木造赤坂遺跡 S H576



第2図 雲出川・安濃川流域の布留式系土器

能な限り報告されていると考えるためである。

（１）布留式系土器の初現と流入時期

布留式系土器と共伴する台付甕の類型を見ると、最もＳ字状口縁台付甕Ｃ類に伴い、次いでＤ類に伴うことがわかる。Ａ・Ｂ類に伴う例もあるが、出土層位の前後関係からＡ・Ｂ類が中心の土器組成となる段階には必ずしも伴わないことが読み取れる。

雲出島貫遺跡ＳＤ 532（第２図）⁽¹⁴⁾では、溝の埋土が最下層・下層・上層に分離されており、各層別に遺物が出土している。報告されているＳ字状口縁台付甕の点数から、最下層はＡ・Ｂ類が中心の段階、下層及び上層はＢ類が存在するものの、Ｃ類の出土が多いと判断できることから概ねＣ類が中心の段階と把握できる。このうち、布留式系土器は最下層では一切伴わず、下層から上層で内面にケズリ調整が施され口縁端部が肥厚した甕、横方向のミガキ調整が施された屈折脚高坏、小型丸底壺と小型器台が伴う。下層及び上層で共伴するＢ類は、内面屈曲部にハケメ調整を残すものと残さないものがあり、外面の横方向のハケメ調整は屈曲部から離脱した位置に施された特徴を示すことから、Ｂ類中段階以降のものと推測される。

一方で、雲出島貫遺跡ＳＤ 55 上層や六大Ａ遺跡ＳＤ 1 土器群 42・43（第２図）は、溝・流路内でまとまって出土したもので、Ｓ字状口縁台付甕Ｂ・Ｃ類と布留式系土器の甕、器面に横方向のミガキ調整が施された屈折脚高坏、小型有段口縁鉢、小型丸底壺・鉢、小型器台が伴う。共伴するＢ類の特徴は、雲出島貫遺跡ＳＤ 532 下層・上層資料と同様の特徴を示す。

以上に挙げた資料は、いずれも溝・流路内からの資料であることから、厳密な時期の限定は難しいものの、総じてみると布留式系土器が雲出川・安濃川流域を含む当地域での初現時期は、Ｓ字状口縁台付甕Ｂ類中段階以降とＣ類が伴う段階であると推測され、主に流入してくる時期はＣ～Ｄ類が組成の中心となる段階に該当すると考えられる。つまり、現在広域の土器編年として用いられている濃尾平野の編年に照らし合わせると、推定される初現時期は早くて廻間Ⅲ式併行段階であり、流入の中心は松河戸Ⅰ式併行段階になることが考えられよう。

（２）組成と器種の継続性

次に布留式系土器の組成をみる。Ｓ字状口縁台付甕Ｂ類中段階以降のものが出土し、相対的に時期が遡る可能性がある資料には、小型丸底壺・鉢、小型有段口縁鉢、小型器台が伴うとともに、甕、屈折脚高坏も一定の組成を示している。しかし、Ｓ字状口縁台付甕Ｃ類のみの共伴例となると小型器台が欠落し、布留式系土器の組成は、Ｃ・Ｄ類が共伴する段階になると、甕、屈折脚高坏、小型丸底壺となる。宇田型甕が加わる段階になると、明確な布留式系土器は屈折脚高坏のみとなり、屈折脚高坏は以後も継続的に組成をなす状況を示す。

このうち、小型器種の消長⁽¹⁵⁾は、近畿地域の布留式土器の器種組成の動きとほぼ連動していると推測されるが、布留式土器で象徴的な甕については、当地域において継続的な組成を示さなくなる。これは弥生時代以来、伝統的に台付甕を使用する煮沸形態が根強く保持されていることが大きく反映しているのであろう。

４ 布留式系土器の受容について

ここまで、当地域における布留式系土器の分布と出土例での組成からみた初現及び流入時期について検討してきた。総じて布留式系土器は、廻間Ⅲ式併行段階に初現し、松河戸Ⅰ式併行段階を中心に当地域へ流入してくるが、それ以降の在地の器種組成に入り込み、かつ継続して組成をなすのは屈折脚高坏である。一方、布留式系土器で象徴的な小型器種や甕は安定的な組成を示さない。

このような布留式系土器の在り方については、早野浩二が濃尾平野で出土した布留式甕の検討を通じて、布留式甕が安定的に受容されることがなく、Ｓ字状口縁台付甕をはじめとする伝統的な台付甕を駆逐する状況ではないということを示している（早野 1996a・1996b）。現状では、当地域においても、ほぼ同様の状況が生じていると推測される。換言すれば、他地域の布留式系土器が流入してきたとしても、伝統的な台付甕という器種・器形を排するまでの受容が当地域で成されなかった結果が反映していると理解すべきであろう。

一方で、屈折脚高坏は安定的な組成を示し続ける。

当地域を含む東海地域では、台付甕に並んで欠山式以来の内彎志向・細部を彎曲に調整し、縦方向のミガキ調整を基調とする有稜高坏が小地域性を持ちながら広範に広がる⁽¹⁶⁾。しかし、屈折脚高坏が出現すると、伝統的な有稜高坏を排して、屈折脚高坏が一躍主体を成す状況と化し、台付甕と布留式系土器の甕との関係性とは全く対局的な状況で推移していく。

この布留式系土器の甕と屈折脚高坏の受容差には、在地の人々が新たに現れた器種・器形に対して受容するか否かの選択性が働き、その結果が各小地域から広域な地域における土器様式の変容をもたらしていると理解できるのではないだろうか。そこには、伝統的な土器の使用法や生活様式を含む文化が背景として存在し、各在地の選択性に基づいて変容しながら受容していった姿があるといえる。

しかし、伊藤裕偉や筆者が以前指摘しているように、具体的事例から器種・器形は新たなものへと転換したとしても、土器の製作レベルでは、在地の製作技法を保持しながら受容が図られている側面も存在する⁽¹⁷⁾。土器製作技術を含めた土器様相の総体として、布留式系土器が当地域でどのように受容されたか否かが、今後近畿地域との関係性を見る上で重要な視点と課題になるだろう⁽¹⁸⁾。

おわりに

布留式土器は、前述したように土器様式として「斉一性」が高いと広く認識されている。しかし、伊勢

地域においては、近畿地域と全く同じ布留式系土器をストレートに認識できる例は、かなり限定されるという見通しを持っている。それらは、近畿地域から直接搬入された可能性が高いものであるが、そのほかの大部分は、形状が細部で異なるものや製作技法（器面調整）が異なるものであり、いわゆる「布留系」などと呼ばれる土器となる。本稿では、伊勢地域における「布留式土器」に関わる複雑な状況から、総じて「布留式系土器」と称してきたが、まさにその状況が伊勢地域の古墳時代前期中葉から中期前葉にかけての土器様相であると考えており、土器の受容の在り方を含めて近畿地域からの影響による「斉一性」という一言では解決できない。

布留式土器を提唱した小林行雄は、小型丸底土器（壺）のような斉一性の高い土器が広く分布する現象を、新たな土器が古い様式に入り込むことによって、古い土器様式の破壊と変容、そして新たに選択が生じた結果、様式の統一がなされた（小林 1935）と述べているが、まさに伊勢地域の当該期は小林のいう状況を示す“揺籃期”を迎えるのである。

本稿では、研究史を整理した上で、雲出川・安濃川流域という小地域を対象に布留式系土器の初現及び流入時期と受容を含む相対的な位置づけを行い概観してきた。しかし、大まかな見通しを示したに過ぎず、検討方法・過程において課題が多いことは否めない。多くのご批判を頂けると幸いである。

（わたなべ かずひと、

三重県埋蔵文化財センター 調査研究2課）

註

- (1) 布留式土器の小型器種は、布留式甕と並んで編年上の指標となる器種として把握され、基本的に近畿地域で型式学的に発展と分化をしてきているという理解がある（寺澤 1987）。一方で、米田敏幸は小型有段口縁鉢と小型器台については、系譜の点で他地域からの影響を受けて成立していると指摘（米田 1990・1991）しており、布留式土器の中心地である近畿地域においても見解が完全に一致している訳ではない。また、赤塚次郎は布留式系小型器種そのものの捉え方に問題提起するとともに（赤塚 2002）、小型器台については東海地域からの影響を受けて近畿地域の小型器台の一部が成立しているという見解を示す（赤塚 1993、関川 1993）。このように、布留式土器そのものについて問題を残しているといえるが、小型器種は一般的に布留式土器の組成を構成するため、本稿では主要器種として認識する立場を取る。加えて、器面調整では旧来から東海地域で施されている縦方向のミガキ調整ではなく近畿地域で一般的な横方向のミガキ調整を採用しているものがあり、器形だけの系譜で判断できない資料も存在することから、本稿での「布留式系土器」には器面調整に反映された影響も含めて捉えることとする。
- (2) 有稜高坏は、欠山式において東海地域における独自性を象徴する共有器種として認識されており（鈴木 1985）、以後の時期における土師器編年においても系譜的に追え、安定的な器種として位置づけられている（赤塚 1990、早野 2011）。
- (3) 名古屋市域の古墳時代前期の土師器を検討した村木誠は、形態上の特徴が共通することから、同時期の近畿地域の高坏から波及したものと考えている（村木 1996・2000）。川崎志乃は、伊勢地域における島貫CⅢ期から現れる高坏C（屈折脚高坏）について、近畿地域の高坏の器形が採用されていると解しており（川崎 2001）、伊藤裕偉も旧来からの在地の高坏とは系譜上、全く異なるものとして捉え、近畿地域の布留式土器にある高坏にその系譜を求めている（伊藤 2002）。この屈折脚高坏をストレートに布留式系土器とするかどうかは、現状において問題を残すが、近畿地域の布留式土器で一定の組成をなしているため、註1前掲と同様に「布留式系土器」として捉えることとする。
- (4) 註1・3前掲。
- (5) 山田は、布留式土器との各併行関係を飛鳥地域の資料で示しており、山城Ⅰ式を坂田寺下層、Ⅱ式を上ノ井手遺跡SD 031、Ⅲ式を上ノ井手遺跡SE 030下層、Ⅳ式を上ノ井手遺跡SE 030上層に充てている。
- (6) 島貫CⅢ期は、纏向遺跡辻土坑4及び平城宮SD 6030下層に併行するとされ、寺澤薫の編年（寺澤 1987）における布留0～1式に対応するとしている。なお、高坏の主体が屈折脚高坏へと移行する島貫CⅣ期は、併行資料として上ノ井手遺跡SE 031を挙げており、布留2式に対応する関係となっている。
- (7) 赤塚 1994、赤塚・早野 2001。
- (8) 伊勢地域のうち橿田川流域においては、伊藤裕偉が松阪市の古響通りB遺跡SE 53資料を挙げながら、堀田遺跡資料との比較検討を行っており、同時期と考えられる資料で異なる流

域での地域的な差異を指摘している（伊藤 2006）。この検討での指摘を踏まえると、流域単位での地域的な差異が存在する可能性があることから、本稿では当該流域のみを対象として検討を行うこととした。

- (9) 註1・3前掲で示した認識を含めて、現状における大きな区分として理解した上での分類である。なお、第1図にある遺物実測図については、第1・2表にある各遺跡の報告書から転載した。
- (10) 第1・2表で示す出土遺跡における資料掲載の発掘調査報告書については、各表の報告書欄を参照されたい。
- (11) 須恵器は伴件しておらず、かつ須恵器出現以前または須恵器出現前後の資料として把握されるものとして捉えている。
- (12) 第3表で示す各遺構の資料については、第1・2表にある各遺跡の報告書を参照されたい。
- (13) 該当資料としては、雲出島貫遺跡SD 532（最下層・下層・上層）・SD 55上層、堀田遺跡SD 42・SR 41下層、小ブケ遺跡SR 315（第23層・第20層・第19層）、六太A遺跡SD 1（土器群42・43・47・49）・SD 4である。
- (14) 第2図にある遺物実測図については、第1・2表にある各遺跡の報告書から転載した。
- (15) 寺澤 1987、米田 1990・1991。
- (16) 註2前掲。
- (17) 同様の指摘は、濃尾平野から静岡県域を対象に布留式系の小型器種の検討を行った佐野郁乃も言及しており、布留式土器の形態の模倣品は、地域及び集落単位の製作技術に基づいていると受容の内実を示している（佐野 2018）。
- (18) 近畿地域の布留式土器については、次山淳と三好玄の製作技術の検討によって、成立から展開に至るまで大きく2つの製作技術系統（吉備系統・山陰系統）の土器で構成され、それらが近畿地域に内包される各地域単位で分布と比率が異なることが示されている（次山 1993・1995・2000、三好 2007・2010）。伊勢地域における布留式系土器が近畿地域のどの系統の布留式土器が流入し、受容されたものなのかを考える上でも製作技術の検討が今後大きな課題であろう。

引用、参考文献

- 赤塚次郎 1986 「『S字甕』覚書' 85」『年報 昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、64-69頁。
- 赤塚次郎 1990 「V 考察」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、50-131頁。
- 赤塚次郎 1993 「東海系器台覚書」『庄内式土器研究Ⅳ』庄内式土器研究会、36-43頁。
- 赤塚次郎 1994 「付論1 松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、84-103頁。
- 赤塚次郎 2002 「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡 考察編』財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター、25-48頁。
- 赤塚次郎・早野浩二 2001 「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化

財センター、13-32 頁。

石井智大 2012「弥生時代終末期遺跡群の動態に関する試論」『研究紀要』第 21 号 三重県埋蔵文化財センター、1-16 頁。

伊藤久嗣 1980「Ⅳ 遺物・遺構の考察 1 土器について」『納所遺跡 ―遺構と遺物―』三重県教育委員会、75-85 頁。

伊藤裕偉 2002「Ⅵ 調査のまとめと検討 2 項 b 古墳時代前期の土器」『堀田 第 3 ～ 5 次調査』三重県埋蔵文化財センター、74-76 頁。

伊藤裕偉 2005「伊勢における古墳時代前期後半の土師器に関する覚書」『研究紀要 ―創立 15 周年記念論文集―』第 14 号 三重県埋蔵文化財センター、33-38 頁。

伊藤裕偉 2006「古墳時代前・中期における伊勢の土器相」『研究紀要―特集 古墳時代―』第 15- 1 号 三重県埋蔵文化財センター、31-36 頁。

伊藤裕偉・川崎志乃 1998「雲出島貫遺跡の古式土師器」『嶋拔第 1 次調査』三重県埋蔵文化財センター、116-125 頁。

川崎志乃 2001「付編 1 古墳時代前期の雲出島貫遺跡」『嶋拔Ⅲ、三重県埋蔵文化財センター』172-193 頁。

小林行雄 1935「小型丸底土器小考」『考古學』6 卷 1 号 東京考古學會、1- 6 頁。

佐野郁乃 2018「東海地域における小型器種の展開と地域色」『2、3 世紀の伊勢湾岸世界を探索』考古学フォーラム、129-140 頁。

末永雅雄・小林行雄・中村春壽 1938「大和に於ける土師器住居趾の新例」『考古學』9 卷 10 号 東京考古學會、481-490 頁

鈴木敏則 1985「欠山式の地域性」『転機』創刊号 転機同好会、10-23 頁。

関川尚功 1993「大和の布留式土器と布留甕の出現について」『庄内式土器研』Ⅳ 庄内式土器研究会、29-34 頁

立花 実 1992「東日本の口縁屈曲鉢」『西相模考古』第 1 号 西相模考古学研究会、2-37 頁

田部剛士 2013「第Ⅴ章 保子里遺跡の調査成果 1 北勢地域の土器編年」『保子里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』鈴鹿市考古博物館、75-90 頁

次山 淳 1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』40 卷 2 号 考古学研究会、47-71 頁。

次山 淳 1995「波状文と列点文―布留形甕にみられる肩部文様の分類・系譜・分布―」『文化財論叢Ⅱ 奈良国立文化財研究所創立 40 周年記念論文集』同朋舎、19-39 頁

次山 淳 2000「土器からみた諸変革」『国家形成過程の諸変革 考古学研究会例会シンポジウム記録 2』考古学研究会、55-73 頁

寺澤 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所、327-397 頁

三好 玄 2007「小型丸底土器における製作技術の二系統」『考古学に学ぶ(Ⅲ) 同志社大学考古学シリーズⅨ』同志社大学考古学シリーズ刊行会、215-226 頁

三好 玄 2010「布留式土器様式構造の再検討―精製器種を中心に―」『待兼山考古学論集Ⅱ ―大阪大学考古学研究室 20 周年記念論集―』大阪大学考古学研究室、369-391 頁。

村木 誠 1996「付編 1、名古屋市域の土師器について」『埋蔵文化財調査報告書 24 伊勢山中学校遺跡(第 5 次)』名古屋市教育委員会、95-112 頁。

村木 誠 2000「屈折脚高杯がもたらしたもの―名古屋市域の事例研究―」『名古屋市見晴台考古資料館 研究紀要』第 2 号 名古屋市見晴台考古資料館、9-26 頁。

早野浩二 1996a「濃尾平野における布留式甕について―門間沼遺跡 94Cb 区 SD15 出土土器を中心として―」『年報 平成 7 年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、118-127 頁

早野浩二 1996b「弥生時代終末期～古墳時代前期の東海地方における畿内系の甕について」『鍋と甕そのデザイン』考古学フォーラム、147-156 頁。

早野浩二 2011「土師器の編年④ 東海」『古墳時代史の枠組み 古墳時代の考古学 1』同成社、95-108 頁。

山田 猛 1994「4 結語(2) 弥生・古墳時代の遺物」『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター、59-72 頁。

米田敏幸 1990「中南河内の『布留系』土器群について」『考古学論集』Ⅲ 考古学を学ぶ会、113-128 頁。

米田敏幸 1991「土師器の編年 1 近畿」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣、19-33 頁。

渡辺和仁 2019「布留式系土器の受容と展開」『小ブケ遺跡(第 3 次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、143-149 頁